

知覚意識における“現象学的な知覚の存在” に関する考察

橋本圭子*

(平成11年10月31日 受理)

A Consideration of “Phenomenological Perceptual Presence” to Perceptual Consciousness

Keiko HASHIMOTO*

Natsoulas suggests that “phenomenological perceptual presence” is an important fact to explain perceptual consciousness. This paper discusses his “phenomenological perceptual presence”. He considers perception to be occurring in ecological environment and examines it as a matter of consciousness. He insists that perceptual acts present to consciousness their environmental objects themselves and that their objects have phenomenological perceptual presence. Furthermore he insists that this presence plays a role in mental functioning at our action with respect to an environmental object. However, I consider that his discussion takes on internalistic, sensationistic character when he treats relations between perception and other mental acts. This paper suggests that mental acts based on perception must be understood in connection with ecological environment if we consider perception to be occurring in the environment.

Key words : perception theory, ecological environment, phenomenological perceptual presence

1. はじめに

人の知覚活動に関する問題は、心理学の主要テーマのひとつであり、今日に至るまで様々な議論されてきた。しかし、初期の精神物理学的研究から、現代の生理心理学的研究、認知科学的研究に至るまで、その主流において知覚活動に関する基本的な考え方は変わらず、伝統的に次のような考え方がその根本にある。すなわち、我々の意識体験としての知覚が成立するには、まず感覚器官に刺激が入力され、脳に至る神経系の経路で情報の変換、処理、伝達がおこなわれる、そしてそれら神経系の活動に対応する心理学的反応を、感覚・知覚として我々が体験する、というものである。種々の知覚研究がその研究対象として、感覚器官での刺激受容から意識としての知覚体験に至るプロセスのどのレベルに焦点を当てているかは、それぞれに異なるが、知覚過程にする上述のような理論的枠組みは概ね共有されてきたといつてよい。

*心理学 講師

これに対して、このようなパラダイムで知覚を解明することはできないと主張し、独自の知覚理論を展開したのが Gibson である¹⁾。彼は、実験室研究を基に構成された伝統的な知覚理論では、現実の知覚場面を殆ど説明できないという事実と直面し、伝統的な感覚主義的な知覚理論は誤りであると考えた。むしろ、知覚は環境と生体の運動との相互作用において成立するもので、その相互作用の中で生体が環境の不変項を抽出することであるとして、知覚は彼によって生態学的に捉え直された。このような知覚は、もはや刺激に対する単なる反応ではなく、生体が対象を体験すること、情報抽出行為そのもの、である。故に、知覚は網膜像のような感覚受容器の活動状態、脳の活動状態、心像などに媒介されるものではなく、直接的なのである*。

本論で取り上げることになる Natsoulas も、知覚意識の理解に対しては、知覚は直接的であるという考え方が有効であると主張する 1 人である^{3,4)}。彼は、知覚に関するこのような捉え方は Husserl に既に見られるものであること^{3,5,6)}、Husserl の生活世界と Gibson の生態学的環境概念が基本的に類似の概念であることを指摘し、両理論の統合を提案している^{4,5)}。彼によれば、伝統的な知覚理論も、近年のいわゆる認知科学も、知覚過程自体に焦点を絞っているために袋小路に入り込んでいるという⁵⁾。光受容器への刺激やある種の脳過程は見ることに必要ではあるけれども、見ることそのものではない、それよりも知覚者の環境にもっと目を向けるべきであるという。同様のことは、彼が有名なギブソニアンであると評する⁶⁾ Reed も述べている。Reed は Holt の比喩を引用して、認知科学者は虹を理解しようとする際に、水滴に起こっていることに目を奪われてその周囲を見ていないようなものだ、という⁷⁾。Natsoulas は、Gibson の主張を基本的には支持しているが、Gibson の知覚論は細部においては明確にされていない点があるとも考えている。本論で取り上げる“現象学的な知覚の存在 phenomenological perceptual presence”⁸⁾は、知覚意識をより明確に捉えようとするために彼が提案した概念である。これによって、Gibson の理論によっては十分説明されていない知覚意識を理解することができるという。彼によれば、現象学的な知覚の存在は、知覚意識を規定する重要な要素であるとともに、我々が環境内の対象に対して何らかの行為をなす際に心理学的機能を果たしている。本論では、Natsoulas のこの“現象学的な知覚の存在”⁸⁾に関する議論を紹介し、これに検討を加えたい。

2. Natsoulas の現象学的な知覚の存在

Natsoulas (1997)⁸⁾によれば、知覚意識においては、環境内の対象自体が意識に存在する。これは、環境内の対象が単なる内的表象として意識に存在するという意味ではなく、この対象自体が“現象学的な知覚の存在”という特徴を持って意識に存在するのだという。この節では、この“現象学的な知覚の存在”の意味について、彼の議論に従って述べてゆくことにする。

*以上の Gibson の知覚理論の説明に関しては、Gibson (1979)¹⁾の著書の他に、この書の訳者解説(辻による)、佐々木(1994)²⁾も参照した。

彼は、この用語の意味を明確にするために、まず思考と知覚を対照させる。

我々が知覚的意識状態にあるという場合は、環境の中にある何か事物や、事象、特性について考えている場合とは違う形で対象を意識しているはずである、と彼はいう。例えば、間もなく沈もうとしている夕日を見る場合、人は太陽を知覚すると同時に、太陽について思考することもできる。いずれもその心的活動の対象は太陽であるが、思考の場合は、知覚のような形で太陽という対象が意識に存在するのではない、というのである。両者の差は、太陽が沈んでしまったときに明白となる。つまり、思考の場合は、太陽が沈む前と変わらず継続することが可能であるが、知覚の場合はそうではない。そのため思考は、太陽の内部のような、知覚の対象とはなり得ないものをその対象にすることができる。

従って、Natsoulas によれば知覚と思考の本質的な差は、対象を有するか否かにではなく、対象の意識の仕方の違い、それぞれの心的活動の内容の違いである。この心的活動の内容に関して、更に彼は、Woodruff Smith (1989) が提案した知覚概念と対比させて論ずる。Woodruff Smith によれば、知覚活動は、目の前に存在する対象が特殊な心的体験に影響を与えているものであるというその因果関係に知覚者が気づくことである、という。知覚は、環境内の特定の対象を指示することであるが、その際その対象が自分の感覚に影響を与えている感覚的な存在であることに気づいている、このようなことが暗黙のうちに起こっているというのである。しかし Natsoulas は、Woodruff Smith のように考えてしまうと、自身の体験に気づくこと、即ち内的気づき自体が知覚意識の対象になってしまい、知覚と思考の本質的な違いを捉えることができないと指摘する。Woodruff Smith は、知覚が対象自体の体験であることも述べているが、一方では内的気づきといい、結局知覚と思考の区別を曖昧にしていると Natsoulas は批判する。従って、知覚はこのような内的気づきを必要とするものではなく、“対象を意識に与える”ことそのものであると考えるべきだという。

ここで、知覚の理解における、Natsoulas の“現象学的な知覚の存在”の意義について整理しておきたい。そもそも彼の問いは、知覚意識とは一体何かということにある。我々が環境の中の対象を知覚する場合、網膜像や脳の活動状態を見たり聴いたりしているのでは決してなく、現実にある対象そのものを見たり聴いたりしているはずである、そのような知覚が生起しているときの意識状態とはどのようなものか、知覚意識にはどのような特徴があるのか、ということが問われている。彼によれば、Gibson の知覚理論は、知覚は環境の中で対象を体験することであると捉え直した点では有用であるけれども、Gibson は知覚の内容については説明しようとしなかった⁵⁾。これに対して、Natsoulas は知覚と他の心的活動との有機的な繋がりを論ずるために、知覚の内容を意識の現象としても明らかにすることが必要であると考えた。James の“意識の流れ”⁶⁾に知覚の内容を取り込む必要があったのだ。そこで彼が提案するのが、知覚は対象自体を意識に与える、というテーゼである。知覚活動自体に関しては、Natsoulas は Gibson と同様、知覚者自身もその一部である環境の中で、知覚者自身の身体運動も含めて（を通じて）対象を体験すること、であるとみなしている⁴⁾。このようにそれ自体として体験される対象は、それを取り巻く環境や知覚者自身の活動と共に体験されたもの、主体の行為をも含むものとなる。つまり現

象学的な知覚の存在という性質を有しているのである。このような対象自体を意識に与えることが知覚であるので、その体験に気づいている、意識的に理解していることは知覚意識には必須ではなくなる。

こうして Natsoulas は、Gibson が知覚は“個人の達成行為”であり、“世界と接触を保つこと”であると述べるにとどまったものを、意識の中に持ち込もうとした。知覚意識そのものは決して内的気づきではないけれども、対象自体——現象学的な知覚の存在を有している——が意識に存在するとみなすことにより、それは内的気づきの対象になり得る。これによって、環境内の対象に関して我々が行う様々な行為を、知覚に基づいた行為として論ずること可能になるというのだが、これが、Natsoulas のもうひとつの論点、現象学的な知覚の存在が果たす心的機能である。

3. 現象学的な知覚の存在が果たす機能

現象学的な知覚の存在が果たす心的機能を論ずるに当たって、Natsoulas は、見えない対象に手を伸ばすこと（リーチング）の例を最初に挙げる⁹⁾。我々は、例えば自分の書斎であれば、完全な暗闇であっても机までたどり着いて、机の上にある物を意識し、手を伸ばすことができるし、また、ベッドの下にあつて見えない靴に手を伸ばすこともできる。彼はこのような事実を照らして、環境内の対象へのリーチングには、現象学的な知覚の存在は必ずしも必要ではない、対象が見えているかどうかに関わりなく、過去の知覚によってもリーチングは可能であると述べる。しかし、現象学的な知覚の存在の有無による決定的な違い、つまり、これが欠けると不可能なことがある。それは、自分がその活動に成功したかどうかを知ること、またはその活動を表明すること、更に現在の成功・失敗に基づいて行為を適切に続けることなど、である。続けて彼は次のようにいう。ただ現実には、現象学的な知覚の存在となっていない対象についても——見る、聞く、或いは触るなどの活動を通しての対象自体の体験が無い場合でも——、我々は自分がそれをつかんでいるという信念を持つことがあるかもしれない。しかし、それは予期や予感というべき意識状態にとどまるものであり、その対象に対して次の行為を適切に続けることはできない。このように、我々が環境内の対象に対して何かを遂行するには、現象学的な知覚の存在に基づいて行われねばならない、というのである。

加えてこれらの行為は、単に対象に現象学的な知覚の存在が与えられているだけでは達成されない、と Natsoulas はいう。我々が対象に対して何らかの行為をするには、この現象学的な知覚の存在に気づく必要があるというのである。先に述べたように、彼によれば知覚は“環境内の対象自体を意識に与えること”であり、その存在に意識的に気づいている必要はない。それは、例えば、赤いリンゴを見ている（体験している）ことであり、このとき“自分が今赤いリンゴを見ているのだ”という気づきは必要ない。これに対して我々が“私は赤いリンゴを見ている”と語るためには、その現象学的な知覚の存在に気づいていなければならないというのである。同様に、行為に成功したかどうかを知る、或いは行為を適切に続けてゆく場合にも、我々は現象学的な知覚の存在を持つと同時に、その存在

に内的に気づく必要があるのだという。

環境内の対象に関する行為——自分自身の体験について語ること、自分自身の行為の成功・不成功をその目標に照らして判断すること、更に次に何をすべきか判断することなど——において、我々が意識する対象は、我々自身の内部に存在すると考えると都合がよい。おそらく Natsoulas の議論の背景にはこのような考えがあると思われる。知覚を“個人の達成行為”，“環境と接触すること”という限りにおいては、それは意識の中の出来事として捉えることは難しい。知覚は意識内で完結するものではないとみなした点で Gibson は正しいが、知覚の内容は意識内に存在し得るはずだ、というのであろう。

ただ、ここでもう一度現象学的な知覚の存在の意味に立ち返ってみよう。既に述べたように、この知覚の存在には知覚者の行為そのものも関与しているはずである。そうだとすると、対象に手を伸ばすという行為そのものも知覚の成立に関わる可能性は十分にある。従って筆者は、対象自体が意識に存在していれば、或いはそのことに内的に気づいていれば行為が可能になるというように、知覚と行為の明確な分離ができるのか疑問に思う。生態学的環境において知覚が成立するとの考えを突き進めるならば、行為と知覚の区別はこのように明確なものでなくなるだろう。Natsoulas は、知覚を意識現象として捉えようとしたが故に意識と行為、主観的世界と客観的世界を分離してしまい、意識を中心に論ずることになるようである。

4. 2種の現象学的な知覚の存在

これまで、Natsoulas の現象学的な知覚の存在の意味と、それが果たす機能についてみてきた。ところが、彼によれば現象学的な知覚の存在には実は2種類あるという⁶⁾。彼は、Gibson の知覚の定義には不十分な点があり、この2種の違いを明確にする必要があると述べる。本節では、この点について考えてみたい。

ここで Natsoulas が問題とする Gibson の定義とは、知覚は感覚興奮が終結した後も止むことはなく、進み続けるものである、というものである⁷⁾。感覚興奮に依存しない知覚は、環境と生体との絶え間ない相互作用と共にあり、中断することがない。“知覚は流れ”である^{7)*}。それ故、我々は遮蔽された面についても、それが存続していることを知覚できる。移動中の対象がスクリーンの背後に隠れてから再び出現するまでの間も運動対象が知覚されるという、いわゆる“トンネル効果”も従って知覚として理解できる。これが Gibson のいう知覚である。

しかし、対象が観察者の網膜に光を投じない場合にも視知覚が体験される、知覚は進み続けるという Gibson の主張に対して、Natsoulas は Gibson がこの点を強調しすぎていると批判する。知覚には、環境内にある対象を意識に与えることによるものと、環境内の対象が視野からなくなった場合でも成立するものの2種があると考えべきで、Gibson は前者を軽視している、というのである。更に、Natsoulas は、Gibson が視野にはない対象が意識される場合を非知覚意識と呼んで、視野にある対象への気づきと区別しているよう

ではあるが、これも誤りであると述べる。なぜなら、Gibson が非知覚意識として取り上げているものは、視野に存在しないだけでなく、実際に対象が存在しない状況であるので知覚意識にはなり得ないからだという。(ただし、Gibson 自身、空想や幻覚や夢などの意識状態を非知覚意識と呼んでおり、知覚意識と区別するためにこの語を用いている。故に、ここでの Natsoulas のこの指摘は適切ではないと筆者には思われる。)

いずれにせよ、ここでの Natsoulas の批判は、Gibson が modal-amodal の区別をしていない、ということにある。彼によれば、Gibson は視野から消えた対象を知覚することを重視するが、知覚は本来、現に視野内にあるものを意識に与えることであるはずだ。視野にないにも関わらず知覚される対象は、視野に入ったまさにその瞬間に、現象学的な知覚の存在になるはずだ、というのである。

繰り返しになるが、Natsoulas のいう知覚とは、環境内の対象を意識に与えることである(しかも、知覚されるその対象は現象学的な知覚の存在という性質を持つ)。例えば視覚であれば、対象が主体の運動や遮蔽によって視野からそれてしまった場合、その対象への気づきは存続するとしても、視野にある場合と全く同じであるはずはない、この2つの状態は区別されるべきである、というのだ。これに対し、Gibson の知覚論では、知覚は主体が自らの運動と環境との相互作用において、環境情報の可変項から不変項を抽出することである。従って、現在見えているのか、見えていないのかの区別は本来不要であるということになる。そのような区別を越えたところに知覚の本質があるのだ。以上のように、この点に関して両者の相違は明白である。ただ Natsoulas は、この遮蔽された対象に気づくことは、前節で述べた思考や、或いは記憶であるとは考えておらず、ここでは知覚意識とみなしている。なぜなら彼はこのとき amodal な現象学的知覚の存在があると述べているからである。

このようにみえてくると、彼のいう現象学的な知覚の存在は感覚モダリティに規定されたものであることが分かる。しかも、Natsoulas は、amodal な現象学的知覚の存在が知覚において果たす役割を殆ど認めていないといってよい。環境内の対象に関する行為には現象学的な知覚の存在が欠かせないと彼がいうとき、明らかに modal なものを指している。見えない対象に対するリーチングが可能なのは過去の知覚のおかげであり、彼の見解では見えない対象に関しては現象学的な知覚の存在はあり得ない。実際彼は、対象が現象学的な知覚の存在という特徴を有するには、その刺激情報がごく最近ピックアップされた場合に限ると述べている。つまり、断続的にはあってもある時間内に modal な存在にならない場合は、amodal な現象学的知覚の存在は、その現象学的な知覚の存在という性質を失ってしまうことになる。トンネル効果についても結局のところ、遮蔽前の対象の現象学的知覚の存在について気づいていなければ起こらないとさえ述べている。このように、彼の考える現象学的な知覚の存在は基本的には modal なものを指しており、amodal な現象学的知覚の存在は極めて特殊なケースなのである。もっとも彼の議論を擁護するひとつの可能性としては、対象を見ているという体験について問題を整理して論ずるためには、この

* これは Gibson 自身も認めているように、James, W. の意識の流れの概念に基づいている。

ような区別が有効だということがあるかもしれない。例えば、環境内の対象に関して我々が何か行為をする際、現象学的な知覚の存在がいかに重要であるかと彼が主張するとき、それを示す例として彼は、見えない対象をつかむことを挙げる。そして触覚その他の見え以外の情報も全くない特別な状況を考えてみれば、対象に現象学的な知覚の存在が与えられていないために、我々はうまく行為を続けることができないことが明らかになるという。しかし、筆者はこのような特殊な状況を想定して知覚を論ずることは、Natsoulas 自身が批判する感覚主義的な知覚論と全く変わらなくなってしまうと思う。現実にはあり得ない状況を設定して、対象自体を体験することであると彼が主張する現実の知覚を議論できるとは考えられない。

5. 生態学的環境における知覚

Natsoulas は、知覚を意識の問題として理解するために、“現象学的な知覚の存在”をひとつのキーワードとして彼の知覚論を展開した⁶⁾。彼の目的は、知覚の内容を“意識の流れ”の中に位置づけることによって、知覚以外の心的活動とのつながりを意識現象として説明することにあつたと思われる。例えば、意識現象としての知覚と思考との間の、また純粋な知覚と、言語表明のような知覚に基づいた様々な行為との間の、相違と関連を説明することである。そして知覚については、生態学的環境（或いは生活世界）において成立するものであるという、基本的見解に基づいて、対象そのものを直接体験することであるとまず定義されたのである。

ところが、前節までの議論を総合してみると、彼が意識の問題としての議論を進めるに従い、或いはそれ故に、知覚と他の心的活動の結びつきが意識内で語られる傾向が強くなる。知覚の内容と他の心的活動が意識内で関係しあうことに焦点が当てられてしまうようである。知覚が生態学的環境の中で成立するものであるとすれば、知覚に基づく様々な心的活動は生態学的環境における知覚とダイナミックに関連するはずである。（例えば、Reed⁷⁾が、認知はアフォーダンスの集合的利用であり、個人内の内的処理を越えたものであると述べていることなどが関連するであろう。）しかし、これを意識現象として——意識内部の問題として——理解しようとする、そこに生態学的環境が入り込む余地はどんどんなくなってしまうように思われる。たとえ Natsoulas 自身そのようなつもりはなかったとしても、意識主義的な傾向が強まってゆくように思われる。更に Natsoulas は、modal-amodal という感覚主義的な印象を与えかねない区別と、加えて modal な現象学的知覚の存在の重要性を強調することになった。確かに、これによって説明できる側面はあろうが、結局、それは伝統的な感覚主義的知覚論によっても説明できる現象があるということと変わらなくなる。もし、知覚を、知覚者が環境との相互作用の中で対象を体験することであるとみなすならば、むしろ、特定の感覚モダリティに限定されないで対象自体を体験すること、その様な現象学的な知覚の存在を追求すべきであつたであろう。

村田は著書“知覚と生活世界”⁸⁾で次のように述べている。Gibson の知覚論は意識の問題を無視していると批判されることがあるが、これは伝統的な感覚主義的知覚論に対する

徹底的批判から生じたものであり、これによって感覚そのものが新しく捉え直される可能性が生まれてくる、と。我々は、伝統的な見方に慣れ親しんでいるが故に、ともすると感覚に基礎をおいた知覚論、知覚と分離した純粋な精神作用としての認知論⁷⁾に陥ってしまうのではないだろうか。生態心理学的な知覚論及び認知論は未だ完成した理論とはいえないし、今後変遷してゆく面もあろうが、生態心理学的な理解を追求するには一種の“パラダイムシフト”^{10,11)}が求められるのかもしれない。

我々が環境の対象について何をいかにして知るのかという問いに対して、伝統的な感覚・知覚論及びこれに基づいた認知論とは別の立場から論じているものには、例えば臨床心理学のような分野がある。佐々木も、生態心理学的な立場からみて臨床心理学のアプローチの仕方が注目されることについて触れている¹²⁾が、筆者は、そのひとつに精神分析学の一派である対象関係論があるだろうと考えている。このような分野で得られている知見を知覚論・認知論的に再評価することによって、この種の問いに答えるためのひとつの手がかりが得られるかもしれない。これに関しては今後の課題のひとつとしたい。

参考文献

- 1) Gibson, J.J. 1979/1986 *The Ecological Approach to Visual Perception*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (邦訳: 古崎敬他訳 1985 生態学的知覚論. 東京: サイエンス社.)
- 2) 佐々木正人 1994 アフォーダンス — 新しい認知の理論. 東京: 岩波書店.
- 3) Natsoulas, T. 1992 The Tunnel Effect, Gibson's Perception Theory, and Reflective Seeing. *Psychological Research / Psychologische Forschung*, 54, 160-174.
- 4) Natsoulas, T. 1996 The Presence of Environmental Objects to Perceptual Consciousness: Consideration of the Problem with Special Reference to Husserl's Phenomenological Account. *The Journal of Mind Behavior*, 17, 161-184.
- 5) Natsoulas, T. 1994 Gibson's Environment, Husserl's Lebenswelt, the World of Physics, and the Rejection of Phenomenal Objects. *American Journal of Psychology*, 107, 327-358.
- 6) Natsoulas, T. 1997 The Presence of Environmental Objects to Perceptual Consciousness: A Difference it makes for Psychological Functioning. *American Journal of Psychology*, 110, 507-526.
- 7) Reed, E.S. 1996 *Encountering the World — Toward an Ecological Psychology*. New York: Oxford University Press. (尚最終章に関しては、本田による邦訳がある: 本田啓訳 1997 世界と出会う — 生態心理学の試み. 現代思想, 25-2, 180-197.)
- 8) Gibson, J.J. 三嶋博之, 古山宣洋訳 1994 視覚システム. 現代思想 特集: アフォーダンス, 22-13, 86-119. (原著: 1966 *The Visual System — Evolution and Environmental Information*. In *The Senses Considered as Perceptual Systems*.)
- 9) 村田純一 1995 知覚と生活世界. 東京: 東京大学出版会.
- 10) Kuhn, T.H. 中山茂訳 1971 科学革命の構造. 東京: みすず書房. (原著: 1962 *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: The University of Chicago Press.)
- 11) Pritchard, W.S. & Duke, D.W. 1992 Measuring Chaos in the Brain: A Tutorial Review of Nonlinear Dynamical EEG Analysis. *International Journal of Neuroscience*, 67, 31-80.
- 12) 佐々木正人, 松野孝一郎, 三嶋博之 1997 鼎談 複雑系・アフォーダンス・内部観測 — 生態を見る. 現代思想 特集: アフォーダンスの視座, 25-2, 58-96.